

## コンラッドのカリカチュアに見るテロリストの類型

渡邊 浩

**Abstract** Conrad's works feature a variety of interesting characters, and some of them include unique exaggerations used in depicting characters. In particular, a typical tendency is that the author uses "caricature" in order to depict the characters he wants to criticize or satirize. The "Author's Note" in *The Secret Agent* (1907) refers to the author's conversation with his friend, and it criticizes anarchists and terrorism. In the "Note," there are words that strongly criticize terrorism, such as "the contemptible aspect of the half-crazy pose." Moreover, Conrad's strong criticism of anarchism appears clearly in "The Informer" (1906), and which evolves further in *The Secret Agent* and *Under Western Eyes* (1911) through the use of strong expressions of "caricature."

This essay aims to analyze the characters of typical terrorists depicted by Conrad, focusing on the common terrorism-related elements among the above three works, and also to confirm the terrorist images in the works. Conrad's excellent caricature includes not only a satire of individual terrorists, but also a three-dimensional depiction of terrorism's folly by making various characters appear duplicitous and having characters emphasize each other's stupidity. Another focus of this research is a betrayal by a double spy, and the ruthlessness of terrorism that makes the protagonists change their thinking against it. These elements are skillfully combined to build a comprehensive cynical world based upon caricature.

### 1. はじめに

*The Secret Agent* (1907)の序文では、フォード(Ford Madox Ford, 1873–1939)と考えられる友人との会話が紹介され、アナーキストに関する批判が述べられている。その中で「半ば狂気のポーズの卑劣さ」("the contemptible aspect of the half-crazy pose")といった強烈に非難する言葉が使われている。コン

ラッドによる本格的なアナキスト批判は“The Informer” (1906)から明確に現われ、*The Secret Agent* に至ってさらに発展し、*Under Western Eyes* (1911)に至るまでその強い「カリカチュア（戯画化）」(“caricature”)を用いた描写を含んでいる。<sup>1</sup>

この論考においては、とくに関連が深い上記の三作品の関係性を視野に入れながら、カリカチュアを基にコンラッドが描くテロリストの類型を分析し、作品におけるその効果と役割を考察する。

## 2. カリカチュアとキャラクター

*The Secret Agent* の序文で作家は社会秩序を乱すテロ活動に対して鋭い批判の目を向けている。

I remember, however, remarking on the criminal futility of the whole thing, doctrine, action, mentality; and on the contemptible aspect of the half-crazy pose as of a brazen cheat exploiting the poignant miseries and passionate credulities of a mankind always so tragically eager for self-destruction. That was what made for me its philosophical pretences so unpardonable. Presently, passing to particular instances, we recalled the already old story of the attempt to blow up the Greenwich Observatory;....

(“Author’s Note” ix-x, イタリアック筆者)

作家はこのように批判を加え、グリニッジ天文台爆破未遂という物語の題材を取り上げた経緯について言及してゆく。コンラッドに関しては西欧の一市民として、社会秩序を重んじる常識人という立場をとろうとしていることが理解できる。また、作中では彼の出自からして極端なロシア嫌い、あるいはロシア的な権力主義を忌み嫌う傾向性が示されている。

コンラッド作品には、テロリストを含めて様々な批判対象となる人物が登場する。そして作家による批判の手法として、しばしば肉体的な特徴を含むカリカチュアを用いる場合が多くみられる。早い時期の顕著な例は1897年発表の短編“An Outpost of Progress”に登場する二人の西欧人、カイヤール(Kayerts)とカルリエ(Carlier)であろう。物語の冒頭から登場人物に関して肉体的また性格的な誇張とカリカチュア的描写が登場する。

There were two white men in charge of the trading station. *Kayerts, the chief, was short and fat; Carlier, the assistant, was tall, with a large head and a very broad trunk perched upon a long pair of thin legs.* (86, イタリック筆者)

アフリカを舞台とした帝国主義批判の要素が色濃く現れるこの作品の中で、二人の肉体的また精神的なアンバランスが彼らの描写に表象されていることがわかる。

カイヤールに関しては、「背が低くでっぷりと太っている」体格で、アフリカの奥地に来ては飽食の西欧文明が揶揄され、カルリエに関しては、「細く長い脚に、頭でっかちの上半身が乗っかっている」人物として描写されている。これは明らかに技術文明が発達し、人間本来の調和がとれた生き方が危うくなった西欧文明に対する皮肉が込められている。

上記のような内容を含めて、コンラッドは批判と皮肉の対象を表象的な揶揄を使って批判する手法、すなわちカリカチュアの手法を用いて描いていることがわかる。<sup>2</sup>

### 3. テロリストたちの風刺

冒頭での紹介の通り、批判の対象であるテロリストに対するカリカチュアは、すでに初期の作品に見受けられる。“The Informer”は、おそらくコンラッド作品の中では“An Anarchist” (1906)と並んで最初にテロリストが登場する作品である。骨董収集家である語り部の「私」(“I”)は、風変わりな趣味をもつ友人（すなわち実際に変わった人物たちを集めていると自称する友人）から、有名な無政府主義者の大物と言われる X 氏 (Mr. X) を紹介される。X 氏は、ロンドンにある架空の一角「ハーマイオニ街」(“Hermione Street”) で起こった、あるテロリストたちの事件を「私」に語ることになる。

X 氏はヨーロッパにまたがる無政府主義者の組織を陰で操る大物という設定であるが、表向きは金持ちの骨董収集家ということになっており、また革命思想に関する著述家という顔ももっている。彼らが計画するテロリズムの情報が、ことごとく官憲に漏れている状況を見て、X 氏たちは内部に密告者がいると確信する。

この作品には数名のテロリストが登場する。テロの指導的な立場にあったホーン(Horne)という革命家は、以下のように描写されている。

He used to say that the bourgeois, the smug, overfed lot, had killed them. That was his real belief. He still worked at his art and led a double life. *He was tall, gaunt, and swarthy, with a long, brown beard and deep-set eyes.* You must have seen him. His name was Horne. (83, イタリック筆者)

「ひょろっとした色の浅黒い男で、茶色い顎髭を長く伸ばし、落ちくぼんだ眼をしていた」と外見の描写がなされているが、コンラッド作品では一般的にテロリストが異様な、あるいは風采が上がらない姿で描かれることが多い。見た目が立派なテロリストが登場する場合は、そこには何か特別な目的が隠されているケースが見られる。

この作品に関しては、確かに X 氏は一見貴族然とした立派な服装と落ち着いた態度物腰の人物として描かれている。しかし後でわかるように、彼の思想自体がテロリズムや無政府主義に対して客観的で冷ややかであり、テロリスト仲間を尊敬している言及もなく、また彼らを応援するブルジョア階級を軽蔑する態度が散見される。<sup>3</sup>

すなわち、X 氏の過剰な紳士気取り自体が、逆にテロリストとしての立場、あるいは人格を揶揄していることが理解できる。テロリストの黒幕という人物は、このように社会や思想を弄んで、世間を軽視している存在であるという皮肉が強く感じられる設定となっている。そしてテロリストを匿い、陰で支えていた政府高官の娘に関しても、X 氏は、単に社会改革的な思想や活動に関わって、進歩的なファッションを身に着けているに過ぎないと断言している。

She went to a great length. *She had acquired all the appropriate gestures of revolutionary convictions—the gestures of pity, of anger, of indignation against the anti-humanitarian vices of the social class to which she belonged herself.* All this sat on her striking personality as well as her slightly original costumes. (81, イタリック筆者)

この物語では、最終的に最も信頼を得ていたはずのセヴリン(Sevrin)が裏切り者、密告者ということがわかる。たとえ警察のガサ入れにあっても、各国の外交機関からのお墨付き、証明書を肌身離さずもっていた彼は、自分の身分を証明できる自信があった。しかし恋愛関係にある政府高官の娘が、偽警官に連行される場面になると、思わず自分の立場を告げ、彼らをその場から引き離そうとする。結局 X 氏らの術中にはまり、まんまと化けの皮がはがれてしまう。

セヴリンに関しては以下の通り紹介されている。

By and by a tall young man came in. He was clean-shaved with a strong bluish jaw and something of the air of a taciturn actor or of a fanatical priest: the type with thick black eyebrows—you know. *But he was very presentable indeed.* He shook hands at once vigorously with each of us. The young lady came up to me and murmured sweetly, ‘Comrade Sevrin.’ (85, イタリアック筆者)

以上に見られるように、彼は顔立ちがよい青年として描かれており、必要以上にその外見を美化されている。しかし彼はテロリストを裏切った人物であることを忘れてはならない。すなわち反テロリスト側の人間なのである。

セヴリンの存在は、コンラッドの後の長編 *Under Western Eyes* の主人公ラズーモフ(Razumov)を彷彿とさせるものがあるが、この短編においては、最後に問い詰められた場面で、「あくまでも信念に基づいて仲間を裏切った」(“I have been thwarting, deceiving, and betraying you—from conviction”)(97)と述べるにとどまっている。<sup>4</sup>

この作品では、二人のテロリスト、ホーンとプロフェッサー(Professor)に関しては非常に狂信的な人物として描かれている。このプロフェッサーについては、後の長編 *The Secret Agent* にも同名で登場する爆弾製造者が存在する。“The Informer”におけるプロフェッサーの描写は以下の通りである。

There, surrounded by tins of Stone’s Dried Soup, a comrade, nick-named the Professor (he was an ex-science student) was engaged in perfecting some new detonators. *He was an abstracted, self-confident, sallow little man, armed with*

*large round spectacles, and we were afraid that under a mistaken impression he would blow himself up and wreck the house about our ears.*

(88, イタリアック筆者)

小男で風采が上がらない狂信的な人物の描写であるが、この人物には *Under Western Eyes* に登場するラスパラ(Laspara)を彷彿とさせる雰囲気がある。

At closer quarters the diminutive personage looked like a reduction of an ordinary-sized man, with a lofty brow bared for a moment by the raising of the hat, the great pepper-and-salt full beard spread over the proportionally broad chest. (285)

この短編は、後の長編作品に比べると確かにまだ習作の域を出ていない部分も感じられる。しかしコンラッドのテロリスト描写に関する特色ははっきりと示されているといってよい。テロリストたちを病的な狂信者のように描き、彼らに対峙する人物たちを見栄えの良い人物に描くという設定は、たとえセヴリンの描写は表面的ではあっても、ある意味で作家のテロリスト批判の意図は込められていると考えられる。たしかにコンラッドの人物描写は複雑な面を含んではいるが、テロリズムやテロリストを批判する存在に対しては好意的な部分も確認できるのである。

X氏の描写はどうかというと、確かに彼は表向きには立派な紳士として振る舞っている。しかし「私」が最後に彼を批判したように、彼の「シニシズム」(cynicism)がとても嫌だったと述べている。彼が黒幕と称しながら、一方ではテロリズムの活動とは距離を置き、事の成り行きを楽しんでいるような精神性、また評論家然として相手や物事にケチをつけている態度を「私」はシニシズムと表現しているが、こうした人物の人格的な落差を強調することにより、作家はテロリストを批判しているともいえるのである。次の場面は、“The Informer”の最後で、「私」が友人からX氏に対する感想を聞かれ、不愉快な本音を吐露するところである。

His enthusiasm grated upon my finer feelings. *I told him curtly that the*

*man's cynicism was simply abominable.*

“Oh, abominable! abominable!” assented my friend, effusively. “And then, you know, he likes to have his little joke sometimes,” he added in a confidential tone.

I fail to understand the connection of this last remark. I have been utterly unable to discover where in all this the joke comes in.

(101-02, イタリック筆者)

「私」に X 氏を紹介した友人の態度も無責任であり、事の重大さに冗談をさしはさむ余地がないことを「私」は吐露する。「私」が友人と X 氏を批判することにより、それが無政府主義に関する危険性と無責任さへの批判につながり、またアナーキズムの虚しさを強調することになる。

#### 4. *Under Western Eyes* とテロリストたち

*Under Western Eyes* では、人物と社会情勢の複雑さを克明に描く点において、“The Informer”の内容を、より発展させたとも思われるプロットが展開される。サンクトペテルブルクの真面目な学生ラズーモフは、政府転覆を目論む学生ハルディン(Haldin)にテロリスト仲間と勘違いされて匿ってくれるように頼まれる。当然彼はその申し出を断るが、ラズーモフはこの事件をきっかけに、テロリストたちとの関係を疑われるのではないかと不安になる。そこでかねてから彼の後見人となっていた老貴族の K 公(Prince K一)の仲立ちで、政府高官のミクーリン(Mikulín)と会うことになる。しかし逆にジュネーヴへ潜入してテロリストの動向を探るスパイとしての任務を依頼されることになる。

この物語でも多くのテロリストたちが登場しているが、物語の真の目的は、テロリズム批判というよりも、コンラッドが永年抱いていたロシアの専制主義やツァーリズムに対する批判であることは明らかである。

このことは、ハルディン自身が腐敗政権に勇気をもって挑む、自分の主義に忠実な学生として描かれている部分や、また後にジュネーヴで登場する彼の母親と妹のナタリー(Nathalie)が、兄の純心さを信じる真面目な家族として描かれている点からもわかる。

ナタリーとラズーモフとは多少なりとも恋愛感情をもつ経緯が描かれて

いるが、ロシアの専制体制に立ち向かうテロリストとその関係者の中には好意的に描かれている者もある。ジュネーヴで登場する女性革命家ソフィア・アントノーフナ(Sophia Antonovna)なども、純粋に主義に殉ずる生き方が強調されている。

作家がテロリズムやテロリストに対してどのような考えや印象を抱いていたか、ということを検証することは興味深い。なぜならば、それぞれのテロリストに対する描写に大きな違いが見受けられるからである。

コンラッドが描くテロリストに関しては、いくつかのプロトタイプが浮かんでくる。まず自己顕示欲の権化であるようなピーター・イワノビッチ(Peter Ivanovich)が登場する。彼は祖国ロシアを追われたあと辛酸をなめ、自分の経緯を自伝に書いて有名になったテロリストとして登場する。しかし、彼の下でこき使われてきた女性テクラ(Tekla)によって、フェミニストという表の顔に隠された、女性を大切にしない、また自伝においても多分に嘘がある疑わしい人物という実像が暴露される。また彼を陰で支えているマダム・ド・S (Madam de S—) も、テロリストのパトロンという立場に自己顕示欲と満足を感じているだけの不気味な女性として描かれている。

“From time to time Madame de S— extended a *claw-like hand, glittering with costly rings*, towards the paper of cakes, took up one and devoured it, displaying her big false teeth ghoulishly.” (217, イタリアック筆者)

このように作家の誇張が加えられたテロリストたちと、彼らを取り巻く怪しげな人物たちの描写がはっきりと窺える。

小男で表向きは編集者を名乗るラスバラの自宅で開かれる革命主義者たちの集まりで、ラズーモフはスパイとして彼らを裏切り続けてきたことを告げ、凶暴な殺し屋ニキータ(Nikita)に鼓膜を破られ、聴力を失うという悲劇に見舞われる。

The revolutionist Nikita had pushed his way in front of Razumov, and faced him with his big, livid cheeks, *his heavy paunch, bull neck, and enormous hands*. Razumov looked at the famous slayer of gendarmes in silent disgust.

(367, イタリアック筆者)



ニキータに関してはテロリスト仲間でも凶暴な殺し屋として知られていたが、後ほど彼もロシア政府の手先としてスパイをしていたことが伝えられる。偽善や裏切り、そして暴力性といった性格がそれぞれに誇張されているが、こうした部分も作家が抱くテロリストの要素として重要なものと考えられる。

## 5. *The Secret Agent* とテロリストたち

*The Secret Agent* に関しては、ロシアの勢力が暗躍するロンドンのソーホー(Soho)地区を舞台に物語は展開され、そこでのテロリストたちの自堕落な様子が目につく作品といえる。

主人公ヴァーロック(Verloc)は(テロリストたちとロシア大使館を行き来する)二重スパイであるが、外見は怠惰で肥満した中年男性として描かれている。また、彼とその環境、彼自身が表向き営んでいる雑貨店の様子を含め、あか抜けない描写がなされている。

*It clattered; and at that signal, through the dusty glass door behind the painted deal counter, Mr. Verloc would issue hastily from the parlour at the back. His eyes were naturally heavy; he had an air of having wallowed, fully dressed, all day on an unmade bed. Another man would have felt such an appearance a distinct disadvantage.* (4, イタリアック筆者)

またロシア大使館に出入りしているヴァーロックに関しては、二重スパイを当たり前のように営んでいる精神性ゆえに、彼の無責任と怠惰が余計に強調されている。それと相呼応するように、彼の仲間のテロリストたちにも、まともに任務を遂行できるような人物はいない。マイケリス(Michaelis)、カール・ユント(Karl Yundt)、オシボン(Ossipon)という三人の仲間がヴァーロックの家に集う場面が登場する。

*Michaelis, the ticket-of-leave apostle, was speaking in an even voice, a voice that wheezed as if deadened and oppressed by the layer of fat on his chest.*

(41, イタリアック筆者)

On the other side of the fireplace, in the horse-hair armchair where Mrs Verloc's mother was generally privileged to sit, *Karl Yundt giggled grimly, with a faint black grimace of a toothless mouth. The terrorist, as he called himself, was old and bald, with a narrow, snow-white wisp of a goatee hanging limply from his chin.* (42, イタリック筆者)

Seated in front of the fireplace, Comrade Ossipon, ex-medical student, the principal writer of the F. P. leaflets, stretched out his robust legs, keeping the soles of his boots turned up to the glow in the grate. *A bush of crinkly yellow hair topped his red, freckled face, with a flattened nose and prominent mouth cast in the rough mould of the negro type.* (44, イタリック筆者)

過去 15 年監獄に繋がれて仮出所中のマイケリスは「でっぷりと肥満して声を発するにもゼイゼイと息苦しい息をする」奇怪な人物として描かれている。おまけに金持ちの老婦人に養われているという状況であった。また自称テロリストの老人カール・ユントは「喋るたびに歯のない口をもぐもぐと動かし、よく聞き取れない声を発し、歩くときはステッキが震える」という無様な様子を見せていた。もと医学生のおシボンも、大柄な黒人系の顔をもつ若者として登場するが、どこか異様で威圧的な雰囲気をもつ人物として描かれている。そして女性から金を巻き上げて生活する自堕落な面があり、最後には夫ヴァーロックを殺害した妻ウィニー(Winnie)からも金をだまし取って逃走するのである。

またヴァーロックが無理やりロシア大使館の書記官ウラジミール(Vladimir)からテロ行為を命じられ、爆弾製造を依頼したプロフェッサーも“The Informer”の場合と同様に過激な破壊主義者として登場する。

His struggles, his privations, his hard work to raise himself in the social scale, had filled him with *such an exalted conviction of his merits that it was extremely difficult for the world to treat him with justice*—the standard of that notion depending so much upon the patience of the individual. *The Professor had genius, but lacked the great social virtue of resignation.*

(75, イタリック筆者)

彼は風采のあがらない小男で、自分の価値を信じ込むあまりに、世間が自分に正当な扱いをしていないことに対して恨みを抱いている。コンラッドが忌み嫌うテロリストの考え方、すなわち個人的な怨嗟を社会的な復讐のための暴力へと転化する傾向性を有する点において、彼は序文でも紹介された「見せかけの思想」(philosophical pretence)の権化といえるのである。

コンラッドはこうした作品の中でテロリズムの愚かさを強調しても恐怖を強調している様子はありません。むしろ人物から発せられる不気味さがもう一つのカリカチュアに関する要素ともいえる。作家は、死を恐れぬテロリストの心理をもつ者として、プロフェッサーの人格を最も危険視していたのではと考えられる。イーグルトン (Terry Eagleton) は *Holy Terror* の中で、プロフェッサーを「生ける屍」(“The Living Dead”)という分類に属する人物としている。

*The Professor differs from his anarchist colleagues in yearning for a revolutionary act which would be utterly unblemished. As such, it would need to be untainted by the interests and desires which drive on the other revolutionaries in the novel. For these ‘pathological’ emotions leash you to the very situation you hope to abolish. An entirely pure act would need to be without motive altogether. Like God’s creation, it would have to be performed just for the hell of it. Yet then there is no more reason to do it than not to do it. This is why there must be an inevitable obscurity about the Professor, whose will is so absolute that it is resolute for no reason at all. He, too, wants to exterminate humanity, but he is neither illogical nor sentimental enough to wish to do this in humanity’s name. (122, イタリック筆者)*

「プロフェッサーくらい純粋に革命行為を希求する人物はおらず、それ自体を求めるがゆえに死すら恐れない存在であるが、また死ぬ理由もないので自ら積極的に死ぬこともない存在である」と結論付けている。しかしこの人物すらもコンラッドは世間に受け入れられない人間として、巧みにカリカチュアに組み入れているといえるのである。<sup>5</sup>

## 6. 結び

このように三つの作品“*The Informer*”、*Under Western Eyes*、*The Secret Agent*を確認してみると、コンラッドのテロリズムとテロリストに関するイメージと考え方が明らかになる。まずそれらの類型としては、

1) 自らの挫折や劣等感を社会構造の欠陥へと転化する考えの持ち主たちが登場する。ホーン、マイケリス、ユント、プロフェッサー、ラスパラまたヴァーロックなども、おしなべてこうした思想性の持ち主である。

2) 自己顕示欲の強いパトロンを気取る人物と、それに頼ることを正当化する怠惰で傲慢な人物たち、すなわちピーター・イワノビッチやマイケリスなどが登場し、パトロンとしてはマダム・ド・Sが挙げられる。

3) 残虐性を秘めた人物たち、すなわちホーンやニキータ等のキャラクターも性格的に強調されていることがわかる。

4) そして陰で暗躍し、テロリストたちを操りまた弄ぶような人物たち、X氏やミクーリン、ウラジミール、またある意味ではセヴリンなどもこのような仲間に加えられるであろう。

しかし、一つの枠組みに皆組み込めるわけではなく、一人の人物が多岐にわたる要素をもつ場合もあり、またその性格の強弱も当然現れるのである。社会的な怨嗟をもち、平気でアナーキズムに殉ずるようなプロフェッサーのような人物もいれば、その他パトロンの寄生虫のような境遇に甘んじている社会の落伍者のごとき人物たちもいる。また小市民的な生活を守るために、自分の主義には拘泥しないヴァーロックのような怠惰な人物も登場する。

こうした人物たちに対して、コンラッドは肉体的、また性格的なカリカチュアを用いることにより、強い風刺を行っているといえる。それは単にテロリズムの恐怖や危険性を訴えるだけではなく、その愚かさとむなしさを強調し告発しているのである。

また、コンラッドの思想的な反映とも思われるが、ロシアの専制主義に抵抗するテロリストたち（例えばハルディンやソフィア・アントノーヴナ等）にはカリカチュアでなく同情的な態度が窺える。こうした意味でも作家の風刺の矛先がどこにあるのかを考察しながら読み解くことは、作品理解に役立つ。

コンラッドのカリカチュアの秀逸性は、個々のテロリストを風刺するだけでなく、様々な性格の人物を多角的に描き、彼らの愚かさを強調している点にある。またそのことにより、テロリズムの愚劣さを立体的に描いている。二重スパイとしての裏切りであるとか、肝心の黒幕たちがテロリズムに対して覚めた眼で距離をおいて見ているような冷酷性、そうした要素が巧みに組み合わせられて総合的なカリカチュアの世界を築いているのである。

コンラッドにとってカリカチュアは対象の分析と批判のための強力な武器である。そしてそれは、人物の描写から出発してはいるが、最終的には社会や国家、文明の分析と批判につながっていることが理解できる。カリカチュアに基づいて作家がどのような人物と社会を描こうとしているかという視点は、コンラッド解釈に大いに資するであろう。

## 注

\*本稿は、2018年10月27日・28日に開催された「日本英文学会中国四国支部第71回大会」における研究発表の原稿に加筆訂正を行ったものである。

<sup>1</sup> テロリストとカリカチュアの関係性については、『コンラッド研究』第9号における拙稿「二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析」1-18で論述した内容と一部重なる部分があるが、本稿は広くコンラッドの描くテロリスト全体の分析を試みたものである。

<sup>2</sup> Fleishman は *The Secret Agent* の象徴的な描写法に焦点を当てて、テロリストの行動が暗示する意味を解き明かす試みを行っている。この点はカリカチュアの働きを裏付ける分析とも解釈できる。

Several terms for distortion of perception operate in *The Secret Agent* as antitheses of knowledge. They include 'ignorance,' 'fool,' and 'madness.' That Conrad characterizes the anarchists as madmen is not as much a political judgment as it is an imaginative projection of their conduct. (15)

<sup>3</sup> この物語の登場人物たちは、それぞれの性格についてかなりの誇張やデフォルメがなされていることは明らかである。しかしその物語の背景や、特に X 氏にまつわる趣味趣向、その他の人物描写に至るまで一種の“farce”「笑劇」的な要素が十分に詰め込まれている点も指摘されている。

The story remains a frightening if exaggerated compendium of culpable manifestations of the phenomenon of belief: fanaticism, hypocrisy, self-delusion, cynicism. It is full of witty absurdity—X the anarchist has a *bombe glacée* for dessert; the radicals ship their explosives from the laboratory in tins containing the innocuous Stone's Dried Soup; the amateur anarchist's brother, a young man in knickerbockers with a vacuous stare and arched eyebrows, entertains the joyless proletariat with comic songs—but the dominant tone is that of an extremely bitter farce. (Bross 115)

- <sup>4</sup> セヴリンの背信の原因については、本文中にははっきりと述べられていないが、Bross はアナーキストの極端な志向性を指摘する。体制を破壊する発想からひとたびアナキズムに幻滅すると、今度は逆にアナキズムを破壊しようとする極端な振れを指摘し、一種の性格の誇張を示している。

He thinks he has escaped from a hollow fanaticism in his apostasy from anarchism, but he is really just as rabid in his present obsession. He has not turned to some more substantial doctrine but has simply compounded anarchism's basic error, its belief in the efficacy of destruction. As once he believed it good to destroy society, now he thinks it good to destroy anarchism. (113)

- <sup>5</sup> コンラッドのカリカチュアの手法は確かにシンボリズムという言葉と強く結びついていると思われる。しかし肉体的にまた視覚的に結びつく表現は、よりカリカチュアの範疇に含まれるものと解釈できる。そうした物理的な範疇の表現から、様々な思想、そして精神的なメッセージを表現できる作家の多彩な技量を感じることができる。Fleishmanはこの点を強調しながら論文の結論を述べている。

Despite its ironic scepticism, *The Secret Agent* carries with it certain implications for conduct. It does not amount to a political program, to be sure, any more than it amounts to a moral code, but it suggests an ideal of social order by its very representation of a world without order. Above all, it proposes the value of human community. (29)

## 参考文献

Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenheld and Nicolson, 1960.

Batchelor, John. *The Life of Josph Conrad*. Oxford: Blackwell, 1994.

Bross, Addison. "A Set of Six: Variations on a Theme." In *Joseph Conrad: Critical*

- Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1992. 105-21.
- Collits, Terry. *Postcolonial Conrad: Paradoxes of Empire*. 2005. London: Routledge, 2006.
- Conrad, Joseph. "An Outpost of Progress." *Almayer's Folly and Tales of Unrest*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 1. London: Gresham, 1925. 86-117.
- . "Heart of Darkness." *Youth, a Narrative, and Two Other Stories*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 6. London: Gresham, 1925. 45-162.
- . *The Secret Agent: A Simple Tale*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 10. London: Gresham, 1925.
- . "The Informer." *A Set of Six*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 3. London: Gresham, 1925. 76-102.
- . *Under Western Eyes*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 12. London: Gresham, 1925.
- Cuthbertson, Gilbert M. "Freedom, Absurdity and Destruction: The Political Theory of *A Set of Six*." In *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1992. 99-104.
- Fleishman, Avron. "The Symbolic World of *The Secret Agent*." In *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1992. 11-30.
- Gillon, Adam. *The Eternal Solitary: A Study of Joseph Conrad*. New York: Irvington Pub, 1960.
- GoGwilt, Christopher. *The Invention of the West: Joseph Conrad and the Double Mapping of Europe and Empire*. Stanford: Stanford UP, 1995.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. Cambridge: Bowers and Bowers, 1952.
- Hey, Eloise Knapp. *The Political Novels of Joseph Conrad*. Chicago: U of Chicago P, 1963.
- Hollander, Rachel. "Thinking Otherwise: Ethics and Politics in Joseph Conrad's *Under Western Eyes*." *Journal of Modern Literature* 38. 3 (2015), 1-19. Web. 2 January 2017.
- Houen, Alex. *Terrorism and modern literature, from Joseph Conrad to Ciaran Carson*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Karl, Frederick R. *A Reader's Guide of Joseph Conrad*. Rev. ed. Syracuse: Syracuse UP, 1997.
- Knoepmacher, U. C. "The Secret Agent: the Irony of the Absurd." In *Joseph Conrad:*

- Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1992. 45-68.
- Miller, David. *Anarchism*. London: J. M. Dent, 1984.
- Peters, John G. *The Cambridge Introduction to Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Said, Edward W. *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*. 1966. New York: Columbia UP, 2008.
- Watt, Ian. *Essays on Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- 横山徳爾 「コンラッドとアナキズム」『人文研究』（大阪市立大学）第 33 巻（1981）:330-44.
- 渡邊浩 「二つの短編から見るラズーモフのキャラクター分析—カリカチュアから悲劇への転換」『コンラッド研究』（日本コンラッド協会）第 9 号（2018）:1-18.

（わたなべ ひろし 就実大学 教授）